

ある「右翼(ネトウヨ)青年」との「会話」

—A君との2年10か月—

塚田正治(「教育産業」関係者)

1. プロローグ「なんで、中国に原爆を落とさなかったんですか？」

初めての授業の時、休憩時間に入ると A 君は唐突にこう質問してきた。

「この間、朝鮮戦争の時、マッカーサーが中国に原爆を落とそうとしたっていう話を聞いたんですけど。」

私が

「ああ、そうだね。それで驚いた当時のトルーマン大統領がマッカーサーを総司令官から解任したんだ。」

と答えると、彼はこう質問を続けたのだった。

「どうして、その時、(原爆を)落とさなかったんですか？落としてれば、あんな悪い国、今頃ないわけじゃないですか。」

ぎよっとする私の目の前には、屈託のない、ちょっと愛嬌を感じさせる笑顔があった。

2015年4月、私は A 君の家庭教師を担当することになった。それからの2年10か月、私は大学合格に向けての道のりを彼と共に歩み、今春(2018年2月)、彼は志望大学合格を勝ち取った。上の発言に明らかなように、A 君の政治・社会・国際情勢・歴史などに関する認識は「ネトウヨ」のそれと言って差し支えない。一方、私自身は基本的に彼らの認識には反対であり、彼らからは「サヨク」と批判されるであろう立場に立っている(とはいえ、私自身は「左翼」と自認しているわけではない)。このように、両者の立場は異なるのだが、彼との決して短いとは言えない日々には、上記のエピソードをはじめいろいろな意味で忘れがたい思い出があり、また、現代社会を造り上げた「大人」の一人として考えさせられる問題を多々与えられた。

本稿は、この稀有とも言うべき体験の記録のために記した、個人的な覚書である。しかし、今日は社会の分断が進み、相互批判の一方で相互理解もまた喫緊の課題となっている。にもかかわらず、ネットの「排外主義」的で差別的な罵詈雑言の向こうに

どのような人がいるのか、そして彼らと本来の意味の対話をする上で何が必要なのかといった点について、示唆を与える情報は必ずしも多くはない。本稿はこれらの点にいささか裨益する点もあり、とすれば、未熟ではあっても個人的な覚書に留まらない意味もあるように思われる。僅かでも諸賢の参考に供すれば幸いである。

事実と大きく異なることは書いていないつもりだが、原稿の性格上、以下の記述は私自身の記録と記憶に拠ったものであること、A君のプライバシーの特定につながる情報は極力、伏せてあることをご了解願いたい。また、既述のようにA君の認識自体はネトウヨと言って差し支えないものだが、彼がネットで発言しているという事実は確認していない。「ネトウヨ」とは、一義的にはネットで「右翼的発言」を行い拡散するから「ネトウヨ＝ネット右翼」なのであって、その事実が確認できない現段階では概念の基本的混乱を避ける意味から、彼を「右翼(ネトウヨ)青年」と称することにする。

2. 「王道」の大学受験と出身校—家庭教師センターからの情報—

家庭教師センターからA君の担当依頼があったのは2015年3月である。担当は古典(古文・漢文)とのことであった。

話が決まり、センターで契約を済ますと、事前に面談しているセンターの担当者からA君についての基本情報を伝達される。

A君は首都圏某県在住の既卒生(昔でいう浪人生)。2浪生だが、現役の際は予備校に通って受験に失敗、1浪の時は現役の時の反省から予備校に通わず独学で挑んだがうまくいかず、家庭教師を依頼することになったとのことだった。私の担当は前述のように古典だが、受験科目は全教科、家庭教師がつくと言う。

志望はB大学a学部。B大学はトップ私大だが、志望理由は興味のある学問・専門分野があり、日本でその分野を勉強できるのが同学部しかないというものだった。尤も、「専門分野」と言ってもあくまで高校生・既卒生の知識に基づくものであり、現在の専門分化した学問状況を踏まえたものではない。しかし、受験生から一般的に聞く志望理由は「国際的な仕事に興味がある」「自然が好きなので環境問題にかかわる勉強がしてみたい」といったもっと漠然としたものである。また、勉強するための大学の環境まで調べてあるのも珍しく、「興味のある学問を勉強するために大学を受験する」という、まさに大学受験の「王道」を行く志望理由であった。

しかし、この話を聞いたとき、私の頭に最初によぎったのは
(できすぎた話だな。)

という思いである。このような「王道」の大学受験ができる受験生はまずいない。そもそも若者は将来のことよりも、「今」を生きるのに精一杯なものだし、競争の厳しい現代ではなおさらである。例えば中間・期末テストにうまく対応できなければ、私立校などでは最悪の場合、学校にいられなくなり、「夢」などたやすく奪われてしまう。もちろん、現在では学校・塾に限らず各種メディアが「将来の夢を持とう」「10年後の自分を想像しよう」といったプロパガンダを連呼するので、皆、前述のような志望理由を述べるし、それはそれで受験の一定のモチベーションになっている。しかし、少し馴染めば深いため息とワンセットの「受かりやどこでもいいですよ」という「本音」が出てくるものである。

(この志望理由は「言わされている」のかもしれないな。)

と思ったが、一度、面談しただけの担当者からの情報では立ち入ったことは分からず、それ以上、深くは考えなかった。

出身校は居住県内の私立校。中高一貫の進学校でA君は中学から通っているのだが、お世辞にも高偏差値とは言い難い。普通は滑り止めに使う学校で、この偏差値レベルの学校は合格実績を上げる必要があるため、一般的には受験指導が厳しくなる。中学受験での挫折とその後のひたすら高偏差値の大学を目指す中学・高校生活が想像された。そして、仮にこの想像が当たっているとすれば、A君は子ども時代からの厳しい勉強生活にもかかわらず、大学受験に二度失敗していることになる。とはいえ、この点も担当者からの話では詳しいことは分からず、想像の域を出なかった(その後も彼から中学受験や中学・高校生活の話は出なかったし、こちらも聞かなかつたので、実際のところは現段階でも不明である)。

父親は医師(病院経営)で母親は専業主婦。父親については後述するが、A君の志望は医学部ではなく、彼の将来は本人の自由に委ねられているようだった。母親とは最初の授業に先立つ面談(センターの担当者ではなく私との面談)で会ったが、対応はほぼ型通りでその後も息子の受験に深く関わってくることはなかった。

A君の印象については、「おとなしいですが話しやすいですよ」とのことで、授業はやりやすいんじゃないですかというのが担当者の見通しだった。それ以外に学習面についてのA君の概況を聞いて、私は4月からの授業に臨むことになった。

3. 年上にもてそうな A 君—最初の印象—

最初の授業は「面談→授業」の流れになる。「面談」はまあ顔合わせだが、生徒さんの状況やご家庭の希望などをうかがい、こちらの対応方針を伝えることが多い。

家庭教師センターからもらった地図に従いご家庭に伺うと、A 君が出迎えてくれ、お母さんを交えての面談となった。前述のようにこの面談はほぼ型通り(お母さんからの要望は「とにかく合格させてください」といったもので、特に具体的なものはなかったと記憶している)に終わったが、この間、A 君を見ていて思ったのは(年上の女性に人気が出るかもしれないな。)ということだった。

プロローグで述べたエピソードからは粗暴でいかつい人物が思い浮かびそうだが、A 君は決してそういう人物ではない。家庭教師センターの担当者が「おとなしいが話しやすい」と言っていたように、むしろそれとは正反対と言っているくらいである。

身体つきは華奢で見た目は虚弱なイメージである(ただし、実家住まいでもあり、規則正しい生活も身につけていたようで、その後、風邪などを引くことはなかった)。顔は、正直、「イケメン」というほど整っているわけではないが、笑顔を絶やさず、何となく愛嬌を感じさせる。態度は丁寧で腰が低い…というより低すぎるくらいで、二言目には「すみません」と言っている。例えば、私が「ちょっと～してくれないかな」と頼むと、「分かりました」と答えた後で「すみません」と謝るという具合である。私などは、少々卑屈な感じがしたが、全体の印象は何となく小動物を思わせ、年上の女性なら「頑張ってる」と声をかけてあげたくなるかもしれなかった。一言で言えば周りが不快にならないように、懸命に気を配っている感じで、「喧嘩」「争いごと」は苦手そうなイメージだった。

面談が終わると授業になるが、家庭教師である以上、当然ながら場所は自室である。部屋に入ると大きなベッド(勉強部屋は寝室を兼ねているようだった)と趣味の道具が目につく。しかし、私の目を引いたのは本だった。自室の本と言えば参考書しかないような受験生が多い中で、書棚と枕元には相当数の本があった。どうやら同世代の中では読書経験が豊富なようだったが、この点はその後の授業からもうかがわれた。漢文では中国由来の「故事成語」の知識を問う問題が出る場合があるが、A

君はこの種の問題を得意にしていた。

「格物致知」「万物斉同」といった、同世代はもちろん、ネット以前の「活字世代」も一般には知らない言葉の知識を問う問題でも苦もなく正解していたが、後述のように彼は「テスト用」の知識が弱いのである。本人の態度からも、これらの知識は読書で身につけたもののよう思われた。

その後、授業に入り、最初の休憩時で飛び出したのが、プロローグの「原爆発言」だった。発言内容もさることながら、「喧嘩」「争いごと」は苦手そうな A 君のイメージとはあまりにもギャップがあるので私はぎょっとしたのだが、その場はやり過ごし、授業を終えた。以後、A 君との B 大学を目指す日々が始まった。

4. 受験勉強から見た A 君

休憩中に物騒な発言があったからと言って仕事を断る理由にはならず、A 君との勉強の日々が始まった(120分授業)。授業を重ねるうちに彼という人間の特徴や学習状況も徐々につかめてきた。後に得た知見も交えて基本的印象を整理すれば次のとおりである。

第一に、自分なりの「なぜ？」という疑問へのこだわりが、ほかの生徒と比べて強いことである。A 君に彼の答が誤答であることを指摘すると、「なぜ、誤答なんですか」という質問が返ってくる。これ自体はどの受験生でもあることだが、彼の場合は「自分はこの部分はこういう風に、この部分はこういう風に考えてこの答を選んだんですが、どこにおかしな所があるんでしょうか。」「今、気づいたんですが、この答(A 君の答とも正答とも違う答)はどこがおかしいんでしょうか。」といった具合に、一つの「なぜ？」から問題が深く掘り下げられ、さらに別の問題に広がっていくことがよくあった。一つの設問につき「なぜ、この答が正解なのか」を掘り下げて考え、(入試問題に解答するための手続きという極めて限定された形であったが)ある種の「論理的手続き」についての知見を、教える側と生徒で深め合うのは「受験教育」の一つの典型とも言える。勿論、合格するために身につけねばならない情報とその処理技術が膨大なものになっている今日、古き良き受験時代のように一つの問題の解き方を二人で何時間も考えるなどということはできなかったが、それでも彼ほど上記のような「受験教育」を実践できた生徒は、私の経験ではいなかったと言える。

第二に、彼の疑問に、彼が理解できるような形で丁寧に説明すると、納得する姿勢である。前述のような演習中の疑問についても、自分の非を認めないなどということとは全くなかった。むしろ、正解の根拠をきちんと説明すれば、必ず「ああ、よく分かりました。」と諒解してくれた。ただし、説明に時間がかかるので、授業時間の延長(無料)は常態化した。前述のように「受験教育」の本来の形に近いものであり、楽しい時間であった(勿論、労働者としては褒められた話ではない)。これらの特徴は前述の読書経験の豊富さとも照応しているように思われた。

第三に、以上の特徴の反面で他者の認識の把握は粗雑…と言うより、正直、そもそも把握の重要性がさほど認識されていないようであった。プロローグの「原爆発言」自体が、自分の認識が今の社会では警戒されがちであることを認識していないことを示しているが、受験勉強の面でも共通する部分があった。

顕著な特徴は「出題文」や問題・選択肢などの文章の「意味」を、自分の認識に引き付けて解釈してしまうことだった。つまり、著者がどういう認識で文章・文を書いたかを十分、踏まえ、場合によっては、ごく基本的レベルで無視し自分に「都合のいい」形で解釈してしまうのである。後に現代文を担当するようになった時の例であるが、「出題文」に「文章を読む際、表層的な読み方しかできない」という主旨の一節があったことがある。問題演習が終わり、解説していると、彼が「自分もこれと同じなのではないですか。」と質問してきたことがある。国語の成績が上がらないので「この文章にあるように、自分は表層的な読み方しかしていないのではないか。」と思ったらしい。当然、この一節を手掛かりにできれば成績向上のヒントをつかみたいという思いがあったと思われる。

ところがこの一節からは彼が、この文に言う「表層的な読み方」をしているという理解は出てこない。なぜなら、この一節では文章を読む主体はAI(人工知能)とされていたからである(ただし、文章全体の主題はAIではない)。つまり、この一節が問題にしているのはAIの文章の「読み方」であって、それは人間とは根本的に異なる認識に基づくものであるから、人間が同じように「表層的な読み方」をすることはあり得ない。当然、AIの認識についての一節をいくら検討しても成績向上のヒントは出ない。

但し、百歩譲って「AIについての一節であっても、何らかの形で自分の『読解力』向上のヒントになるのではないか？」と考えるならまだ話は分かる。しかし、彼の場合は違った。演習中に上記の疑問で頭が一杯になり、この一節の主語がAIであることを

失念したのである(当然、演習の成績は悪かった)。つまり、自分の疑問にとらわれすぎて、「出題文」の著者の認識や一節の主旨を放念してしまい、自分の国語の成績向上のヒントに使えるかもしれないと「都合のいい」ように解釈してしまった形なのである。

彼の場合、このような「独善的解釈」・「思い込み」によって文章・文の「意味」を誤読してしまうことが多々あった。しかも、自分の「読み」が正しいと信じ込んでいる場合も多く、こちらが誤りを指摘すると愕然としていることも一再ならずあった。現代文でこうなのだから、古典ではなおさらである。ただし、前述のように丁寧に説明すれば理解してくれたし、現代文の「大意」「概要」は一般的な読書であれば支障ない程度にはつかめていた(そもそも現在では教科書さえ読めない大学受験生も珍しくないのだ)。しかし、現在の重箱の片隅のそのまた片隅をほじくり返すような入試問題では大きなハンディとなった。

また、「ケアレスミス」も多かった。例えば、「ア～オから正解を選べ」という選択問題で「a」と解答しているといった具合である(正しくは「ア」)。他にも解答の書き忘れ(途中で飛ばした問題を解答し忘れる)や、「定番」の「適切でないもの」を選ぶ問題で「適切なもの」を選んでしまう、「答えを二つ選べ」と指定のある問題で一つしか選ばない、といったミスも多かった。現在の厳しい入試ではこれらのミスも「致命傷」になりかねず、大きなハンディとなった。また、事務的な連絡面でのミスも多く授業の円滑な進行を妨げた。

「テスト用」の知識や技術も現在の入試の精度には及ばなかった。「独学」の生徒によくあるように勉強の「ツメ」が甘いのだが、ただ高校や予備校でよく使われる基本レベルの参考書の問題であればほぼ正解できた。教師・講師の課した演習は真面目にこなしてきたことがうかがえ、この点については、本人よりも、変化の激しい現在の入試に敏速に対応した受験指導が行われなかったことが原因ではないかと思われた。

総じて言えば大人に言われたことは真面目にこなしてきたものの、自分を上手く社会と噛み合わせることができず、それが受験勉強にも反映している印象だった。前述のように彼の中学・高校(および小学校)生活の実態は不明であるが、タイプとしては「集団行動」が基本の学校では足手まといにされやすいタイプであった。教師も生徒も分刻みのスケジュールをこなさねばならない現代の学校ではなおさらであり、彼の

卑屈とも思える周囲への対応は学校での「地位」の反映ではないかと推測された。志望大学合格を目指す家庭教師としては「基礎面」から演習を積み上げていくよりない状況であった。

5. 連発する「右翼発言」と「黙認」の理由

プロローグの「原爆発言」のような「右翼発言」は授業と並行して連発されていた。

それは授業の合間に彼が「ちょっとスマホで見たんですけど」と言って中国・韓国・北朝鮮などに対する「ヘイト情報」を伝える形であったり、彼自身の「オリジナルストーリー」を開陳してくれる形であったりした。後者の「オリジナルストーリー」は例えば、自衛隊を使って中国軍が守る北京を攻略するための戦略・戦術であったり、「生意気」な韓国を「懲らしめる」ために北朝鮮と手を組むための外交戦略であったりした(勿論、韓国を「懲らしめた」後は北朝鮮を「やっつける」のである)。全てが荒唐無稽というよりない内容であったが、本人にとっては語りたくてたまらない内容であったらしく、喋りだすとこちらが止めるまで(大抵は授業時間がなくなるという理由で止めていた)、機関銃のようにまくし立てていた。特に北京攻略の軍略を語った際には、中国軍・自衛隊の戦力分析からその配置・用兵上の特徴や問題点に至るまで細かい注釈が付き、真偽はともかく情報の細部へのこだわりが妙に感心した。しかし、最も強く感じたのは、そこまでこだわった「ストーリー」を聞いてもらいたいという「承認欲求」だった。

このように書いていると、お前は何でそんな「ヘイトスピーチ」を黙って聞いているのだ、という批判が聞こえてきそうだが、それには理由がある。人権侵害を助長しているという批判を受けかねないので説明しておこう。

基本的な理由はそもそも私はA君を志望大学に合格させるために来ているのであって、彼の現状・歴史に対する認識の歪みを正すために来ているわけではない、ということである。彼の「右翼的」「排外主義的」認識についての議論に時間を取られ、肝心の受験勉強の時間がなくなってしまうと、本来の授業目的から外れてしまうことになる。

とはいえ、これだけでは受験勉強ができれば「右翼的」「排外主義的」認識は放置しておいていいのかという問題が残る。にもかかわらず、表立って批判をしなかったのは、第一に批判自体が直ちにこのような認識の修正につながるわけでは必ずしもな

かと思っていたことである。実は私はこれまでも「排外主義」「ヘイト情報」の影響を受けているとみられる生徒を担当したことがある。尤も、A君ほど露骨なケースは初めてで、大抵は授業の合間に「中国ってむかつきませんか？」と探りを入れるように聞いてきて、適当にこちらがお茶を濁すとそれ以上は話題にしないという感じである。しつこくはないものの、「排外主義」、場合によっては「ヘイト情報」に「親近感」を持っていることは明らかだったが、そういう生徒に共通しているのは成績・入試で苦労していることだった。尤も、家庭教師が担当する生徒は大抵は成績・入試で問題を抱えているのだが、上記のような生徒は中間・期末テストが赤点続きだったり、既卒生(浪人)生活がかなりの年数にわたっていたりと、皆、家庭教師を依頼する生徒の中でもかなり過酷な環境に置かれている生徒だった。誤解のないように付言しておけば、そういう生徒が皆、「排外主義」「ヘイト情報」に「親近感」を抱くわけではなく、「やっぱり戦争はだめだよ」「周りの国とは仲よくした方がいいよ」と「平和・友好」の重要性を語る生徒も少なからずいるのだが、上記のような生徒の場合は現在の学校・受験生活のストレスが「親近感」の「温床」となっているのは明らかだった。A君の場合も中学受験の挫折の可能性や大学受験の二度の失敗から同様と思われ、受験のストレスが解消されない限り、「右翼」認識は克服されない可能性が高いと判断された。仮に私の批判によって授業の際には黙っても、その分、スマホで「ヘイト情報」を拡散していることも考えられたし(彼のネット上の発言は確認できないが、可能性はあった)、そもそも時給計算の家庭教師では「あの先生は合わない」とクビにされる可能性が高いと思われた。

第二に、A君が「右翼」認識についても批判に、一定程度(あくまで「一定程度」だが)耳を傾ける姿勢を見せたことである。前述のように「右翼発言」は聞き流していたので、基本的に批判は加えなかったが、それでもあまりに不愉快であったり、止まらなくなったりした時には、話を打ち切る必要から問題点を指摘する場合もあった。尤も、彼が納得しやすい形で伝える必要があった(紛糾したのでは元も子もない)ので大した話はしていない。例えば、中国「批判」を続ける彼に「でも、今は中国との取引で持っている企業も多いから、あまり日中が対立すると潰れる会社なんかも出てきて、生活に困る人が増えるんじゃないの？」と質問するといった具合である。それまでの発言から、彼が日中・日韓の「つながり」は考慮していないと判断した上での質問なのだが、案の定、「盲点」を突かれたようで沈黙する。その隙に「まあ、とりあえず勉強に戻ろ

う」といった具合に彼を授業に向かわせるのである。

私が興味深いと思ったのは「批判」を受けた時の彼の反応である。前述のようにこちらの指摘は彼の「盲点」であったから、まずキョトンとしたり愕然としたりするのだが、次に「あ～、なるほど～」「ああ、そういう問題もあるんですかあ」と感嘆の声を上げることがしばしばあった。尤も、だからと言って「批判」をきちんと受け止めるわけではなく「荒唐無稽」な発言を重ねることもあった。例えば、中国との経済的つながりについては二度、「ネタ」にしたのだが、二度目には「何とか中国の資源や資本だけこっそり日本のものにして、中国を攻撃する作戦はありませんか？」という質問が返ってきた。「あるわけないだろ！」と突っ込むよりない質問なのだが、「批判」自体は必ずしも「拒否」してはいない様子であった。むしろ、自分の「ストーリー」の問題を指摘し、認識を生産的なものにする示唆を与えてほしいといった願望が感じられた。勿論、前述の「承認欲求」から彼の主張を否定するのは受け入れられないはずで、「批判」の「受容」といっても極めて限界があることは予想されたが、前述の受験勉強の面から、一他者の認識の把握に難があるものの一彼は本来、殻の中の「自分」に固執する頑迷な人物ではないようだった。

これらを総合すると、家庭教師の立場からの授業の場の対応としては、彼の様子を見つつその認識の非を徐々に指摘していく方が、まだ「右翼認識」の克服に寄与するように思われた。勿論、このような「微温的対応」で彼の「右翼認識」が根本的に改まるわけではないが、既述のようにこの点は正面からの批判も同様の可能性が高かった。

但し、この対処は私が、少なくとも近代以降の「ルーツ」が「日本」国内にある「日本人」だから可能であった側面は否定できない。私や私の非常に近い知人の「ルーツ」が中国・朝鮮半島にあれば、彼の発言を黙認できないことは十分に考えられる。しかし、私は（「在日」の知人はいるものの）そういう出自・環境になく、彼の私の前での発言に対し自己や知己の人権を守らねばならない立場にはなかった。そして、少なくとも授業中の「右翼発言」は密室でのもので、聞いているのは私一人であり、デモやネットでの「ヘイトスピーチ」と違って「実害」はほとんどなかった。

以上の理由で私は彼の「右翼発言」を「黙認」することにした。

6. スマホ・「マスコミ不信」・「ネトウヨ心性」

尤も、彼の「右翼発言」はすぐに下火になっていった。第一の理由は受験勉強に集中せざるを得なかったことである。前述のように合格のための課題は山積みで「雑談」に時間を割いている余裕はなかった。第二に、彼が自分の発言・認識が現在の社会では「引かれ気味」になるということを認識したことである。すでに述べたように、私は彼の発言に基本的に批判は加えなかったのだが、まともに取り合うことはなかったし、発言内容によっては驚きや不愉快さを隠せないこともある。その様子を見て彼は自分の認識・発言が社会の中では容易には受け入れられ難いということが分かったようだった。前述のように、彼は周囲の人間に対しては卑屈と思われるぐらいに腰が低く、周りが不快にならないように気を配っているような感があった。自分の発言・認識の社会の中での位置づけを把握すれば、発言を控え気味にするのはある意味で当然と言えた。

尤も、集中力を維持する上からも勉強以外のことは何ら話さないというわけにはいかない。そして、社会の在り方と何ら無関係な話題はあり得ないから、紛糾の可能性は常にあったのだが、私は彼が反発しそうな話題は避けたし、彼も「原爆発言」や「北京攻略計画」のような「過激」な発言は遠慮するようになった(勿論、その後の発言も「右翼認識」に基づいていたことは変わらない)。こうして、彼との授業が終わるまで、お互いに相手が気分を害さないように気を使いつつ、雑談を交わすという微妙な状況が続くことになったのだが、幸い、特にトラブルは起こらなかった。寧ろ、話を重ねているうちに彼に「ウケる」話題が徐々にわかっていき、雑談で笑いを取り勉強のストレスを緩和することもできるようになっていった。

とはいえ、話題が限定された状況であったことは間違いない。しかし、それでも話を重ねていく内に徐々に彼の「右翼認識」の特徴がより見えるようになってきた。第一に、情報源はほぼスマホだということである。既述のように彼は読書経験が同世代の中では比較的、豊富なようなのだが、「社会問題」やニュースについて述べる時は、ほぼ「スマホで見たんですけど…」という前置きが付いた。第二に、既存のマスコミへの不信の強さである。彼からはしばしば「今のマスコミは偏っている」「どうしたら今のマスコミの『偏向』は直るんですか?」といった発言・質問が聞かれた。「偏り」とは言うまでもなく「左傾化している」という意味で、TVについてはNHK、新聞については『朝日』『毎日』は勿論、『読売』に至るまで「サヨク」なのであった(『産経』については特に

言及がなかった)。読書経験にも関わらずスマホを主な情報源にしているのは、この「マスコミ不信」によるものと思われた。

以上のような情報環境の影響が大きいと思われるが、その「現実認識」が実態から全くかけ離れている場合も見られた。基本的に紛糾しそうな話題は避けていたのだが、何かの拍子に憲法「改正」の話になったことがある。問題が問題なので多くは語れず、

「憲法『改正』を緊急にやってくれという『一般庶民』はそんなに多くないんじゃないかな。今は経済が厳しくて皆、暮らしが大変なもの」

と述べた。実際、憲法「改正」については国論は二分されているし、第二次安倍内閣が選挙のたびに基本政策として掲げているのはアベノミクスという経済政策だから、間違いではない。私としては至極、当然のことを述べたつもりだったが、彼は珍しく

「ええっ」

と大声を上げ、私が見た中では最も愕然とした表情を見せた。恐らく彼が見ているであろうスマホの画面の「改憲論」一色の「世論」を、現実の「世論」と誤認したようだった。前述のように、受験勉強の面からも彼の他者の認識の把握の難はうかがえたのだが、このような情報環境はそれに拍車をかけているか、あるいはその原因となっているかもしれない。

また、自分たちへの批判には基本的に向き合わない姿勢も見られた。これは4浪目の時のことだが、何かの折に彼が

「ノンキャリアって何ですか？」

と聞いてきたことがある。

「まあ、官僚の中で幹部候補ではない人のことだよ」

と答えたが、ちょうど安倍晋三首相夫人・昭恵氏の立場(公人か私人か)が問題になっていた時期だった。氏についている官僚がノンキャリアだったことを知っていたので、具体的説明として

「例えば、昭恵さんの世話みたいな仕事をしているらしいね。」

と補足した。明確な表明はなかったものの発言から彼が安倍政権支持なのは明白だったが、ノンキャリアの説明のために「昭恵氏問題」を使っただけで安倍政権批判をしているわけではない。ところが彼の反応は微妙な笑みと

「その話題はちょっと…」

という返答だった。当然、話題にしないでくれということなのだが、紛糾を避けるというよりも、自分たちが批判されている話題は聞きたくないという様子だった。「匿名性」という「絶対安全地帯」の中で他者に罵詈雑言を浴びせる「ネトウヨ」の特徴的姿勢と共通しており、彼のネットでの発言は確認できないものの、心性の点では通じるものがあるように思われた。

7. 本当の志望理由―「下の大学に落ちるのが怖い…」―

A君は2浪目もB大学に受け入れてもらえなかった。尤も、入試対策を担当する家庭教師の仕事は基本的に入試前に終わる。但し、大学受験は入試期間が長期にわたるので授業期間中に入試・合格発表がある場合もあるが「本命」の入試は受験スケジュール後半になることが多いので本質的な状況は変わらない。A君の場合もB大学a学部の入試日直前に授業を終え、彼に「頑張ってるね。」と声をかけ「お世話になりました。」とA君宅を去った。「基礎面」と古典読解への慣れ(前述のように彼は誤読が多く、古典の文章を読むこと自体の訓練が必要だった)に時間を取られ、点数を取るための技術を身につける「問題演習」が手薄になったことが不安だった。

不合格を知ったのは家庭教師センターからのメールである。それにはご家庭からの連絡が引用され

「今年は残念でした」

とあった。しかし、それに続き

「けれども、引き続き一年間よろしくお願いします。」

と新規依頼が明記されていたのである。担当科目は2浪目同様、古典である。結果は出なかったものの、授業と対応はA君に評価されたようだった(前述のように保護者はほとんど授業に介入してこなかった)。

ただ、正直、メールを見た時の感想はいささか複雑だった。現在の入試はただ頑張りさえすれば結果が出るほど甘くない。差し当たり、昨年度の蓄積の上に手薄になった部分を補強することが合格への道筋だったが、必ずしも「テスト向き」とは言えないA君の個性を考えると、その過程で様々な新たな課題が出るのが予想された。勿論、再度の依頼は有難く、仕事は引き受けたが

(この仕事は容易ではないな。)

と気を引き締め、再び、A君宅に通う日々が始まった。

新年度の一回目の授業でA君と基本的な受験方針を話し合った。勿論、B大学a学部を目指すという根本は変わらないが、昨年度と異なり今年度は問題演習に時間を割ける。B大学a学部の問題も(前述のように「問題演習」というよりも古典読解の訓練が主にならざるを得なかったが)昨年度の内に演習しており、他学部・他大学の問題演習が可能な状況にあった。とすれば、どこの問題を演習するかが問題になるが、当然、受験スケジュールと連動させるのが望ましい。つまり、実際に受験する大学・学部の問題を演習する方が合格に近づくわけで、とすればB大学a学部以外にどこを受験するかが問題となる。ちなみに昨年度はB大学a学部以外に同大学のb学部を受験しただけだったが、私は古典のみを担当しており全体のスケジュールに關与する立場になかったので、特に立ち入らなかった。

基本的なプランは二つである。第一は、言わばa学部中心と言えるものである。前述のように彼のやりたい学問分野の研究室はB大学しかないのだが、a学部自体は同大学に限られるわけではない。例えば、●●法という分野が研究できるのは特定の大学だけかもしれないが、法学部という学部は珍しくないように、a学部自体はほとんどの主要大学に設置されている。とすれば、B大学a学部を目指すにしても、不合格の場合は取り合えず他大学のa学部に進学して基礎的な訓練を積み、大学院などからB大学に進学するプランも考えられた。また、調べてみると、当該分野の教授は他大学にも出講しており、B大学でなくても教えを乞う機会はあるようだった。

第二はB大学中心とも言えるものである。つまり基本的にB大学の学部をa学部だけでなく、b学部・c学部・d学部…と受験していくプランである。B大学はトップ私大だから合格すれば学歴は最高レベルになるし、入学後にa学部へ転部するという選択肢もある。しかし、不合格になるリスクも高いし、学部によっては彼の希望とはかけ離れた学問分野の勉強をしなければならない。後者の場合、a学部へ転部できても勉強のハンディになることは確かで、事実上、転部、そして希望の学問分野の勉強の断念につながる可能性もあった。彼の志望理由や3浪目という状況を考えると採用しにくいプランと思われた。

しかし、彼が言下に選択したのは第二のプランだった。つまり4浪や自分の希望する学問分野の勉強ができなくなるリスクを冒しても、あくまでB大学を目指すというこ

とである。意外に思った私は理由を聞いてみたのだが、その答は衝撃的なものだった。すなわち、彼が俯きつつ小声で述べた理由は

「B大学より下の(偏差値レベルの)大学に落ちるのが怖い…」

というものだったからである。つまり「簡単な大学に落ちるのが怖いから、難関のB大学を目指す」ということだった。「なぜ、B大学を受験するのか」という問いへの回答である以上、この答は基本的な、そして本当の志望理由と見るべきだが、驚くべきものであることは言うまでもない。B大学より下位の偏差値レベルの大学に合格する自信がなければ志望校を下げるのが当然である。それを逆にトップ大学を目指すというのだから支離滅裂と言うよりなく、彼の本当の志望理由は当初、聞いていた「王道」のそれとは裏腹な、非論理的なものだった。

彼の「下の大学に落ちるのが怖い」という「恐怖」について立ち入って聞くことはしなかったが、受験生なら誰でも持っている「ひょっとしたら、どこにも入れないのではないか」という「恐怖感」とつながっているように思われた。しかし、一般に受験生はそれを理性でコントロールする。普通はそのような「恐怖」は意識しないようにするし、仮にそれに襲われることがあったとしても、「いや、自分なら必ず受かる」と意志の力で封じ込める。それでも自信がなければ前述のように志望校を下げて確実に合格を勝ち取れるように対策を打つ。なぜなら、大学を志望する根本的理由は一般的には高学歴を得て生活の安定につなげるためであり、それには合格が至上命題だからである。理性を失って「恐怖」に駆られれば合格はおぼつかず、大学を受験する意味自体が失われてしまう。

しかし、A君は受験生ならだれでもが持っている、少なくとも「恐怖」をコントロールし得るだけの理性を既に失っていたと考えざるを得なかった(ただし、A君が理性を失ってしまうのは、私が知る限りではこのような「恐怖」と後述するそれに基づく「憎悪」のコントロールに関してだけであった。前述のように普段の日常生活では彼は周囲が不快にならないように常に気を配っており、気配りが過剰な感はあったが「非理性的」とは言えなかった)。そして、彼にそれを失わせたものは現代社会における大学不合格者、あるいは一定の偏差値以下の大学にしか合格できなかった者への「負け組」という認識であることはほぼ明らかだった。勿論、どの偏差値で「勝ち組」「負け組」を分けるかは共通認識があるわけではないが、確実に言えることは一般的な受験生の認識ではB大生であれば「負け組」と見られることはまずない、ということであ

る。逆にそれより下位の大学であれば常にその可能性があり、不合格であればなおさらである。

また、B大に落ちている分には、「あくまで最難関のB大を目指した結果」と抗弁することも可能で、下位の偏差値レベルの大学に合格した者に「負けた」ことには必ずしもならないとも言えた。勿論、仮にこのような論理が通用するとしても、それにはB大学合格が前提であり、下位の大学にさえ合格する自信がないのでは詭弁と言うよりないが、これだけ強い「負け組への『恐怖』」を抱えているにもかかわらず、普通は「負け組」と見なされる既卒生(浪人生)生活が続けるには、それを支える論理が必要である。A君から直接に表明があったわけではないが、彼がこのような論理で自己の立場を「正当化」していた可能性は高いように思われた。仮にこの推測が当たっているとすれば、上記の志望理由はこの側面からも必然化されていたことになる。

ともあれ、彼の本当の志望理由は、このようなB大学合格による「『負け組』の恐怖」からの「解放」と思わざるを得なかった。これは彼をB大学に駆り立てている根本的要因が、一般的には理性でコントロールされている「恐怖」であることを示している。勿論、興味のある学問分野を勉強したいという志望理由は「嘘」ではない。無事、B大学a学部合格できればその分野の専攻に進んだであろうし、その知的素養から見て真摯に勉学に励む可能性もあった。けれども、彼の知的好奇心は大学を目指す根本的要因にはなっていなかった。

しかし、支離滅裂な理由に基づく行動が成果に結びつかないのは当然である。また、仮に彼が前述のような詭弁で「自己正当化」を図っていたとしても、一般的には既卒生は大学生よりも下位の「負け組」と認識される。「負け組」になりたくないが故に「勝ち組」を目指し、通用しないために、「最下層」の「負け組」とも言える既卒生生活を重ねるといった状況がA君の現状だった。そして、その既卒生生活を「正当化」するためにさらに「勝ち組」を目指さざるを得なくなっている可能性もあり、まさしく「泥沼のスパイラル」の様相を呈していた。背景に中学受験以来の彼の「傷だらけ」と見られる人生と「新自由主義」「教育改革」の下での「敗者」への冷酷な視線が存在するのは明らかだった。克服には何より自分に自信を持ってもらうよりないが、背景を考えると容易なこととは思われなかった。私は予想をはるかに超えた事態の深刻さと「新自由主義」「教育改革」の下での若者の実態に呆然とした。

8. 知的素養と「差別体質」―「なぜ、僕は合格らないんですか？」―

3浪目からは、A君から

「なぜ、僕は合格らないんですか？」

という本質的な質問が寄せられるようになった。

尤も、最初から上記のような核心を突く問いに辿り着いたわけではない。そもそもこのような問いは教師・講師によっては「そんなことは自分で考えろ！」「俺が一生懸命教えているのに、お前がミスばかりするからじゃないか！」などと罵倒されかねない。我々の話はお互いに相手の感情を害さないことが前提であり、生徒の立場にあって種々、気を配らねばならないであろう彼が自分の問題意識を整理しきれないのは、ある意味で当然だった。

最初の問いは

「なんか、ここがよく分からないんですけど…」

といった具合である。とりあえず文章内容や解法について解説したのだが

「それは分かるんですけど…」

と納得しない。それでは彼が「分からない」ことは何なのかを二人で掘り下げていくと、結局、上記の質問に行き着くことになった。このようなことがほぼ毎週、続くようになり、現在の彼を捉えている根本的な問題意識が上記の問いであることが明らかになった。

彼がこのような問題意識を持つに至った背景には3浪目という状況や私との付き合いが2年目に入り馴染んできたという事情もあったと思う。しかし、既卒生生活を重ねてもこのような問題は考えない生徒が大多数である。そもそも状況を打開するには合格する以外になく、それには合格点がとれるところまで「テスト技術・知識」を磨き「本番」でそれを発揮できるよう精神面を整える以外にない。要は「もっと勉強しろ！！」「『強い心』を持て！！」というところに問題が帰着しかねず、だから怒鳴る教師・講師も出るのである。こういう「考えても意味がない」と普通は考える問題に彼を固執させるのは根本的には持ち前の「なぜ？」へのこだわりのように思われた。

また、上記の問いに行き着く過程で彼が執拗に問うたのは

「そもそも、なんでこんな問題が出るんですか？」

ということだった。つまり、自分の「テスト技術・知識」が弱いのは分かったが、そもそも、なぜ大学で学ぶのにこんな技術や知識が必要なのかということだった。この疑問

は受験をしていれば誰でも感じるし、これまでも同じ質問を発する生徒はいた。しかし、その執拗さは彼が知りたいものが合格のためのノウハウではなく、自分を追い詰めるものの「正体」であることを示していた。私は彼の高い知的素養を感じざるを得なかった。

「なんでこんな問題が出るんですか？」という彼の問いに答えるのは差し当たり簡単である。

「平均点を下げて大学の『偏差値ブランド』を上げる、あるいは守るため」である。「教育改革」によって研究・教育予算が削られた結果、なりふり構わず受験料収入を稼がねばならなくなった大学が、「偏差値ブランド競争」に鎬を削るからであった。彼を追い詰めているものが、まずは「新自由主義」とその下での社会と国家であることは明らかだった。問題はこの答を彼に伝えるかである。彼の問いは大学合格に直接、つながるものではなくこういうやり取りに時間を割くのはそもそも家庭教師の本来の職務から外れているとも言えた。

だが私は躊躇なくこの答を彼に伝えることにした。そもそもこの問いは、受験生が自らの受験経験をきっかけに教育・社会の在り方に視野を広げる糸口になるものである。家庭教師という立場以前に一人の「大人」として答えるべき問いであり、これまでもこの問いを発する生徒には特に問題がなければ答えてきた。

しかし、とりわけA君にはこの答を伝える必要があった。何より彼には自信を持ってもらわねばならなかったからである。問題を「テスト技術・知識」の問題に留めては、合格できない原因を彼のその弱さに求める「自己責任論」に帰着しかねない。彼が直面している課題は現代の社会・国家がもたらす「構造的問題」であることを伝え、原因は彼の「無能」ではないことを認識してもらわねばならなかった。勿論、その意義は大学合格に尽きるものではないが、大学合格の上からも不可欠であった。

彼に上記の答を伝えると、一瞬、茫然とした表情を見せ、沈黙した。しばらくすると「たった…それだけのことなんですか？」

と啞然とした表情のまま質問があった。

「う～ん…、まあ、そうなんだよねえ。」

と答えたが、「大人」の一人である以上、私の責任も免れがたく、批判される可能性があった。

「誠に申し訳ないが、ここでは今の社会の現状を踏まえてどう切り抜けるかを考える

しかないなあ。」

と続けると、彼はようやく普段の表情に戻った。その後の授業から「雑談」の話題は教育や社会の在り方に広がるようになり、授業時間はさらに延長されるようになったが、私は可能な限り応じるようにした。

こうして「雑談」がさらに広がる中で彼の「差別体質」も露わになっていった。

「なぜ、僕は合格らないんですか？」

という問いは容易に

「なぜ、僕以外の人は合格るんですか？」

という問いにつながる。「雑談」の中で A 君は自分を置き去りにして大学に合格した者への憎悪を隠さなくなっていた。

「明らかに僕より勉強していなかった奴が入っている。」

「あんなにちゃらちゃらしていた奴がなぜ、大学生なんですか？」

といった発言がしばしば聞かれるようになった。なお、これまでも述べてきたように彼の中学・高校、予備校での生活は全く不明だが、これらの発言と対照的な友人たちとの「楽しい」思い出が語られることは全くなかった。

その中で彼が差別意識を剥き出しにしたのがお笑い芸人だった。テレビなどに出ているお笑い芸人には高学歴の人もあるが、A 君の憎悪は彼らに向けられた。

「なんで、大学まで出てあんなバカなことをやってるんですか？」

「あんなくだらないことを仕事にして、日本人として恥ずかしくないんですかね。」

「そもそも、何であんなバカな連中が大学に入れるんですか？」

なかなか結果の出ない受験生にとって合格者への感情は複雑なものがあるが、多くはそれを口にしない。また、お笑い芸人がテレビの中で見せているのが仮に「バカなこと」だとしても、本人が「バカ」とは限らないことを認識している。彼らの「陰の努力」を伝える芸能情報が多いこともあり、「あの人たち、本当は頭いいんだね。」「一生懸命、努力する、すごい人たちらしいね」といった形で「リスペクト」するのが一般的である。こうして、羨望が憎悪に生まれ変わるのを抑制するのだ。

しかし、A 君はすでにその抑制が利かなくなっていた。前述のような芸能情報も知らないわけがないが全く「スルー」して、お笑い芸人を目の敵にした。この結果、お笑いという仕事は「バカなこと」、お笑い芸人は「バカな連中」と決めつけられ、憎悪はお笑いという職業や芸人自身に対する差別に「成長」することになった。しかし、彼らがタ

ーゲットになった理由は単に侮蔑の対象にしやすいということだけだと思われた。憎悪を抑制できない以上、叩きやすい職業や集団を差別するのはある意味で「自然」であり、彼の差別は「体質的」な問題と思わざるを得なかった。

彼が中国や韓国・北朝鮮とその国民・「関係者」たちへの差別意識を持っていることは「右翼発言」から明らかだが、基本的構造は全く同様と思われた。ちなみに「在日」の人たちについての発言はなかったが、多くの「排外主義」「ヘイト情報」の影響を受けた生徒がそうであるように、国家であるこれら三国に比べ、「マイノリティ」である「在日」の人たちの情報が極端に少ないからに過ぎないであろう（「在日特権」などが異様なまでに喧伝されるのは、情報の少なさの裏返しではなかろうか）。何らかのきっかけで、日本社会では圧倒的な弱者である「在日」に対する「ヘイト情報」に親しむようになれば、この三国とその人たちよりも激しく彼らを攻撃する可能性もあったように思われる。

とはいえ、彼を批判をしたからと言ってこの「体質」を必ずしも克服できないとみられるのは前述のとおりである。「旧友」・お笑い芸人の問題についての発言が出ると、一通り、聞いた上で

「いやあ、一見、チャラチャラしているように見せかけて意外と勉強していたのかもよ。」

「他人というのは、見た目の印象だけでは分かんないものよ。」

といった形で返答し

「まあ、他人のことをあれこれ言っても自分が合格るわけじゃないから、取り合えず勉強に集中しよう。」

といった「よくある発言」で彼を勉強に向けさせるようにしていた。

言うまでもなく、無知は差別の温床だが知識があれば差別がなくなるわけではない。私は高い知的素養を差別構造の中に取り込む有力な媒体が「自尊感情」の毀損であることを改めて知った。

9. 父親との接触

あくまで可能性の一つとして挙げるだけだが、A君の「自尊感情」毀損の原因となったものの一つとして、父親の存在が推測される。これは4浪目に入ってからのことだ

が、A君がほとんど半泣きの表情で「父親にこんなことを言われた」と訴えることが度々あった。父親の発言の内容は概ね「このままでは今年も受からない」「今年だめならもう受験の支援はしない」といったもので、4浪目という状況もあり恐らく発破をかけるつもりだったと思われる。しかし、A君のダメージは深く、私は「お父さんも心配してるだけで本気ではないと思うから気にしなくてもいいよ。」などと励ましたものの、勉強が手につかないこともあるようだった。

実は3浪目の時に、私は一度だけその父親と接触した。帰る時間に豪雨が降り、たまたま在宅していた父親が車で駅まで送ってくれることになったのである。車中、A君の話になったが、わずか数分の同乗とはいえ息子を責める言葉はなかった。

「覚えることは得意なはずなんですがねえ。」

「小さいころから、何でもコツコツ積み上げるタイプなんですが…」

といった具合で息子の長所と頑張りには認めているように思われた。

しかし、驚いたのはその運転である。駅までは普通の住宅街を走るのだが、ほとんど暴走とも言うべきスピードだった。車の運転には地域によって個性があるが、この近辺をこんな猛スピードで駆け抜ける車は、約2年通う中で見たことはなかった。駅まで私を送り届けるという「目標達成」と自分の話に集中しており、同乗している私の心境は度外視されているようだった。

ひょっとしたら、父親はA君の長所や現状を見ているつもりで、実はあの時の私の心境同様、彼の「現状」を見ていなかったのかもしれない。そもそもテストが上手いかない子どもにとって、両親の高学歴(前記のように父親は病院経営)はそれだけで脅威であるが、A君の話によれば父親は比較的スムーズに医学部に合格したようで、子どもからの受験勉強にもかかわらず、結果の出ないA君の心境・状況をどこまで把握していたかは疑問の余地がある。

ただ、A君の父親が父としての役割を全力で果たそうとしてきたことは、A君の話からも想像できた。例えば、彼の趣味は父の感化によるものだったし、a学部志望の表向きの理由となった学問分野への興味も父との旅行がきっかけだった。医師として多忙とみられる生活を送りながら、息子との「触れ合い」の時間を作るべく努力を重ねてきたことは明らかであり、また、前記したようにA君の志望は医学部ではなく、将来に対するA君の自由も尊重しているようだった。

しかし、「新自由主義」「教育改革」の下、子どもが置かれた状況は右肩上がりの時

代とは異なってきている。僅か、一度の接触であるから断定的なことは言えないが、従来の「常識」ではあり得ない子どもの状態を認識するだけの、繊細な感受性と観察眼が父親にはなかったのかもしれない。そして、A君の現状とすれ違ってしまった父親の努力が、却ってA君の負担になり、それに応えられない自分を責める「自尊心」の毀損につながった可能性も考えられなくはないように思われる。

10. 異例の続投と「致命傷」―「空気が読めない」A君―

A君は3浪目もB大学に拒否された。とは言え、苦戦は受験前から予想していた。当初からは減ったものの誤読やケアレスミスが頻発していた上、受験学部は当初の方針通り、基本的にB大のみだった。他大学の受験も勧めたのだが前述の理由で拒否され、極めてリスクの高い受験プランとなった。さらに彼の受験の実情は合格を目指すどころか「テスト以前」のようだった。去年より受験学部が増えたので授業期間中に入試が何回かあったのだが

「●●の科目で失敗してしまった。」

と言うならまだしも、

「緊張しすぎてしまって、問題が解けない！」

「テスト開始の合図があると、手が震えてしまってシャーペンが持てない！」

などと訴えた。

「勉強を積み上げてきた分、実力はついているのだから自信を持とう。」

「場慣れしていけば緊張も緩和されるから、気にせずにa学部を目指そう。」

などと励ましたが、家庭教師センターからのメールで不合格を知ったときは「やっぱり、そうか」と嘆息せざるを得なかった。

ところが、そのメールにはご家庭からの再々依頼が明記されていたのである。担当は古典から現代文に変更だが、引き続き1年間、見てほしいと言う。

しかし、いくら何でもこれは異例である。通常、家庭教師は当初の目標が達成できなければ講師交代(私の立場からはクビ)である。しかも、A君の場合、失敗は二度であり、さらに二度目は3浪という「非常事態」でのものだった。大学への挑戦を続けるにしても、ご家庭の立場からすれば講師を代えて新たな合格の可能性を模索するのが、自然であろう。

さすがに驚いた私は、なぜ自分が依頼されるのかをセンターに問い合わせた。答は他の講師は全員交代なのだが、私だけは「相性がいい」とA君が強く続投を希望し、再々依頼になったと言う。私は、A君が求めているのが彼の話聞いてくれ、一緒になって胸の奥の「なぜ？」を形にし、そして、僅かでもいいから解決のための示唆を与えてくれる人物なのだということを確認した。B大合格の自信は全くなかったが、依頼は引き受けることにした。

ところが4浪目の授業が始まってしばらくしてから判明したのは、2年にわたる私と他の家庭教師の努力が徒労であったという事実である。どうも彼は時間内に国語の問題を解き切れなようなのだ(ただ、自己弁護のために述べておけば、彼が「時間不足」に陥るのは他科目でも見られることだった)。

限られた時間に大量の問題を解かねばならない現在の入試では、スピーディーに正解を見つける技術が非常に重要になる。古典から現代文に担当が変わったのは、(ア)現代文で、特に「出題文」の「内容」につき分からない点がある、(イ)古典についてはある程度要領がつかめたので、A君が自分で学習し不明な点を部分的に私がチェックする形にしたい、という二点が理由であり、授業当初は(ア)の問題への対応から「出題文」の「内容」解説を中心にしていた。しかし、授業を重ねると現代文の演習が所要時間を数分オーバーすることが度重なった。勿論、古典でその分、時間を稼げれば問題ないが、昨年度まで担当していた古典も似たようなペースだったのである。

不安に思って聞いてみると、現代文・古典を通して解くと時間内に収まらず、最後の2～3問はとりあえず解答欄を埋めていることが珍しくないと言う。僅か2～3問とはいえ、文字通り「一問のミス」が明暗を分ける現在の入試では、事は国語のみに留まらない。勿論、前述の精神面からも不合格の原因はこの問題だけではないが、これでは42.195kmのフルマラソンに挑んでいるのに40kmしか走れないようなもので、トップレベルのB大学に受かったら奇跡と言う位の話である。合格を勝ち取る上では「致命傷」と言え、当然ながら、我々家庭教師の努力は徒労であったと言わざるを得ない。

しかし現代文・古典と担当が分かれており国語全体を通した演習ができない以上、こうした問題が起こることは事前に予測し得た。そのため、私は1年目の時から国語全体を通した演習をしておいたほうが良いとアドバイスし、彼からは特に問題ないと

の趣旨の回答を得ていたのである。しかし、実際のところ、彼は2年にわたって取り組んでいなかったのだった。私はテストと同じ制限時間内で国語全体を解く「実戦形式」に授業を切り替えることで対応したが、彼はやはり周囲の情勢が自分に何を要求しているのかをつかむ力が弱いと言わざるを得なかった。一言でいえば「空気が読めない」のであり、現代社会で一番割を食うタイプだった。

以上の経緯で授業は「実戦形式」に切り替わることになった。こうした演習を積み重ねる中で「事件」は起きた。

11. A君との「会話」―「僕はやっぱりバカなんですか？」―

その日、私は彼に演習を始めてもらおうと、タイムキーパーをしながら宿題の採点を始めた。宿題はC大学の問題でB大学より一格下の位置付けになっている。ちなみに宿題については自分で採点して誤答を自分で直した方がいいとアドバイスしていたのだが、彼が自分で自分の答案に赤ペンを入れることはほとんどなかった。

答案はほとんどが「×」だった。しかし、私は意に介さなかった。C大学は「秀才校」のイメージはないが、すでに入試問題の実態は乖離しており難易度は高い。そもそもB大の「一格下」の段階で簡単なわけがないのであり、傾向をつかめていない生徒が「崩壊」することはよくあった。勿論、この点は事前にA君にも伝えており、「演習経験を積むのが目的だから結果は気にしなくていいよ。」と話し、彼も「はい、分かりました。」と答えていた。

ところが複数枚ある答案の何枚目かを採点していると、彼のシャーペンが止まっていることに気が付いた。見ると彼の眼が「×」だらけの答案を凝視している。前にも話したように傾向がつかめていないとよくあることだから気にしなくていいよ、と伝えようとしたが、先に口を開いたのは彼だった。

「僕は…」

とだけ言ってしばらく間を置いた。顔からは表情というものが消えていた。再び唇が動き出し、彼は

「僕は、やっぱりバカなんですか…？」

と言った。その瞬間、私は体の奥からぞっとする悪寒が立ち上ってくるのを感じた。か細いその声が地の底から湧き上がってくるような、湿った不気味さに満ちていたから

である。肚の中が陰雨で濡れているような冷たさを感じながら、私は
(初めて彼の「肉声」を聞いているのだ。)

と思った。彼の声の不気味な湿り気は動画や映画などで「メンヘラ」など精神の均衡を失った人が自分の胸の底の「負の感情」をむき出しにする時のそれと同質であり、彼の心の深奥から発せられたものなのは明らかだった。普段は笑顔や「右翼発言」で覆い隠され、心の奥底でひっそり息をしている声だった。競争原理で痩せ衰えた身体と、反対に膨れ上がった怨念だけで出来ていた。

「いや、そんなことはないよ。」

と答えたが、即座に

「なら、なぜ、僕はできないんですか？」

という質問が返ってきた。声は涙声になっていた。こちらが答える前に A 君は

「こんなに、こんなにやっているのに出来ないなんて…」

と続け、

「もう、人生が終わっているとしか思えない。」

と呟いた。そして、うわ言のように

「何か…何かが、おかしい。」

と眩くと、崩れるように突っ伏し嗚咽を始めた。

私は早急かつ正確な対応を迫られた。しかし、彼が私に求めているものは明確に把握していた。彼は私に合格するための課題を求めているのだ。自分がバカではないのなら、どこを直せば合格できるのかを示してほしいということだった。それは家庭教師の立場から、自分が今の苦しみから解放される道筋を示してほしいということでもあった。「教育産業」で禄を食む「先生」である以上、当然、答えるべき問いであったが、それは大人に「言わされた」ものではなく、まさに心の深奥から発せられたものだった。極めてナイーブな問いである故に、対応を誤れば彼の心を深く傷つけてしまう恐れもあった。

私は

(プロの腕の見せ所だな)

と思った(なお、以下の私の対応についての認識は後から整理したもので、その場では職業経験に基づく「勘」にしたがって、自分の脳裏に浮かぶ言葉を紡いでいるだけ

である)。

「要するにさあ…」

と間をおいて時間を稼いだが、彼の課題を示す言葉はすぐに見つかった。

「認識に多様性がないんだよね。」

それは彼の「右翼認識」や「差別体質」の根幹をなす問題でもあった。彼が顔を上げた。

「C大の問題も傾向がつかめていなければ『大崩れ』することもあるってことは話したよね。」

「はい。」と彼がうなずく。

「そもそも、入試問題なんて大学の『偏差値ブランド競争』の産物で、本来、『頭の良し悪し』とは関係ないって話も、これまでにしてきたよね。」

また、彼がうなずいた。

「にもかかわらず、C大の問題ができなくてショックを受けるっていうことは、C大学の学生はバカだと思っているからでしょ。」

「少なくとも尊敬はしていませんっ！！」

こちらから顔を背け、憤然と彼は言った。本音を言えれば「誰が何と言おうと、C大の奴らはバカなんだ！！」と言いたいには違いなかった。そうでなければ、彼にとってB大学を目指す意義がなくなるからである。「勝ち組の栄光」は「負け組」がなければ成り立たないのだ。

「でも、大学とか合格の価値なんて人によってそれぞれじゃん。」

彼が再びこちらを見た。

「例えば、君と違って家にお金がなくて家庭教師にも塾の先生にも教えてもらえない人が独学でC大に入ったとしたら、『バカ』ってことにはならないでしょ。」

再び、彼がうなずいた。

「で、申し訳ないが、今までも話してきたように、君はテストが得意というわけじゃない。けど、その君がB大に入ると、『テスト向き』の人がB大に入るとも、意味が全く違うじゃん。」

また、彼がうなずく。

「ところが君の場合、単純に『B大は頭がよくてC大はバカ』と色分けしてしまって、偏差値表や一般的なイメージに出てこない、こういう色んな意味合いが全くカットされち

やうんだよね。」

彼はまた俯いて

「それは…自分でもそう思います。」

と言った。

「で、いつも『勝ち組』に乗っかっていられればそれでもやっていけないことはないのかもしれないけど、上手いかない時にそれだと苦しいのよね。」

再び顔を上げた彼が大きく目を見開いてこちらを見た。

「早い話、B 大に行きたかったら、間違えても気にせずに C 大の問題が出来るようになるまで練習すればいいわけじゃん。つまり、泣いたりこういう話をしている間に、『もう一丁、やります！』って感じで C 大の問題を解けばいい。実際、C 大の問題ができないからと言って『バカ』というわけじゃないし、『テスト向き』じゃないのも君の責任じゃないわけだから、気に病む必要はない。少なくともその方が B 大に近づく。」

彼はそのまま私のことを見つめていた。

「ところが『C 大はバカだ』と見下しているから、いざ、自分がその問題ができないとなると自分を否定せざるを得なくなっちゃうのよね。そうするとどう対応したらいいか、分からなくなるんで、進む道が見えなくなってしまう。で、結局、B 大学が遠のいていく。そういうことが、この件に限らず色んなレベルであると思うんだよね。」

彼は再び俯いた。しかし、今度は自分を恥じているのが明らかだった。私は具体的な方向性を示せばこの問題は乗り切れると確信した。

「とりあえず、この受験勉強を通して自分のそういう認識を改めるっていうか、克服することを目標にしたらどうかな。例えば、B 大以下のレベルの学校の問題ができなくても、『この大学は自分の足りない部分を教えてくれているんだ』と思って、できるようになるまで取り組むとかさあ。その方が B 大に近づくわけだし…」

と言った後、一呼吸おいてこう言った。

「それに、正直、B 大に合格する以上に重要な問題だと思うよ。」

私はそのまま俯いている A 君を見ていた。私の言葉は内容自体は大したものではない。要約すれば「他人をバカにすれば自分もバカにされる。」「常に謙虚であれ。」といった程度のことで、「認識の多様性」と言ってもその意義は「処世術」のレベルに留まっている。しかし、「もう、人生が終わっているとしか思えない。」と吐露する彼には何より具体的な生き方の問題として答える必要があった。そして、保護者や学校教師、

塾・予備校の講師が皆、この種の言葉を子どもに伝えるのは、やはり否応なく風雪に見舞われる人生を乗り切る上で必要だからである。私も生きるための根本的な心構えや認識の点でこれに代わる言葉を持っているわけではなく、また、彼にとっても理解しやすい言葉と思われた。ただ、単に受験生活を乗り切るだけでなく、それを糸口に、荒唐無稽で非生産的な「右翼認識」や「差別体質」を克服してほしいという思いがあった。

問題はそれが彼の「欠陥」を責める「上から目線」の言葉と受け取られかねないことだった。前述のように彼を傷つけることはできなかったのも、この点は一番、懸念された。しかし、私は注意深く取り組めばその心配はないと思っていた。そもそも私の言葉は彼が「バカ」ではないことを証明するためのもので、彼にとって最も切実な「なぜ？」に答えるための言葉だった。また、今まで私はテストのミスは勿論、その憎悪も差別も責めたことはなかった。最後に、何より私は彼が、彼の求めているものを踏まえ、丁寧に論理を紡げば理解できる知性の持ち主であることを知っていた。それは彼がB大に合格できないことや事実上の「ネトウヨ」であることとは、何の関係もなかった。

そして、幸いにして私の見通しは当たったのである。A君はしばらくして顔を上げ、顔一面を涙で濡らしながらも、そこからこぼれんばかりの笑顔を見せたのである。私の言葉は彼の心の無数の傷をえぐることなく、あの「肉声」が潜むその奥底に辿り着いたようだった。私は

(初めて彼と「会話」をした。)

と思った。

12. エピローグーA君が「大人」に問いたかったことー

A君は4浪目にしてB大学合格を勝ち取った。とはいえ、「会話」や私との「実戦形式」の授業が原動力になったとは言えない。「下位」の大学に落ちることは相変わらず怖がり、受験校は基本的にB大学のみだったし、事務面も含めミスも相変わらず多かった。合格したのも第一志望のa学部ではなかったが、今年は全体にB大学の問題が易化し、重箱の隅をつつくような複雑な問題が苦手なA君に幸いしたようだった。ただ現役時代から数えれば5年にわたる大学受験生活を耐え切った精神力はや

はり評価すべきだろう。

「右翼認識」も変わることはなかった。「実戦形式」の授業は問題を解くだけで60分から90分を要するので、120分の授業では「雑談」をする時間は激減した。したがって、「政治的話題」はほとんど出なくなっていたが、ある人物について「『反日的』では？」と疑問を呈したり、「ナショナリズム」批判の「出題文」に露骨に嫌な顔をしたりするようなことはあった。私は「国民意識」や「愛国心」一般を否定するつもりはないが、彼の場合はその内実を掘り下げないまま、「レッテル張り」や批判への拒否を行っているようだった。結局、私は彼の「右翼認識」や「差別体質」について正面から取り上げることはなかったから、これはある意味では当然のことだった。そもそも大学合格を目的とし「点取り競争」の技術を磨く受験勉強で、彼の心中に巣食った「『負け組』の恐怖」を克服することは無理だった。

とは言え、「会話」の持つ意義は大きかった。演習結果が芳しくない時もしばしばあったが、他者への憎悪や差別を露わにすることはなくなり、自分の認識の単純さや粗雑さを反省する言葉が聞かれる時もあった。「歴史修正主義」や「排外主義」への批判(尤も対象は日本のそれではなかったが)のような彼の認識と抵触すると思われる「出題文」についても、拒否反応をむき出しにするのではなく「この著者の論理だということが出てくると思うんですがどうでしょうか？」といった具体的な疑問が呈された。少なくとも安易なイメージに無批判に寄りかかり、対象の特徴・意義を多様な視点から捉えることなく、その中の叩きやすい対象に自分の憎悪をぶつける愚は伝えられたはずであり、最初の「原爆発言」の頃よりは認識は大幅に生産的になっていた。私にとっては、根本的な問題を指摘する言葉であっても、やり方によっては「上から目線」と拒否されずに伝えることができるということを体験できたことは貴重だった。

「会話」が成立したのは、こちらが「彼は本当は何を求めているのか」を把握していたことが大きい。私がA君に初めて会ったのは彼が20歳の時だったが、そもそも彼は「大人」に問いたいこと(ある意味では教えてほしいこと)をずっと抱えて生きてきたように思われる。

私なりにそれを要約すれば、第一に

「なぜ、自分は『負け組』なのか？」

ということである。「なぜ、僕は合格らないんですか？」という問いはまさにそれを問うていた。彼は大人から言われたことは忠実にこなしてきた「いい子」であったと思われ

る。その窮屈さに耐えきってきたのに何ら果実が得られないどころか、恐らく冷酷な視線に晒されてきたと思われるから、この疑問は当然のことである。

求める答に「テスト技術」が含まれていることは、具体的目標が大学合格である以上当然だが(それさえあればあんなに苦しむ必要はないのである)、本当に聞きたいことがそれではないことは「そもそも、何でこんな問題が出るんですか？」という問いが執拗に発せられたことからわかる。合格できない彼自身の原因は「テスト技術・知識」の問題や「空気が読めない」ことなど色々指摘できるが、彼が聞きたいことは「なんで、そんなことでこんなに苦しまねばならないのか？」ということだった。

第二は

「いつまで経っても『負け組』の自分はどうやって生きていったらいいのか？」

ということである。彼が「僕はやっぱりバカなんですか？」と問うた後、「もう、人生が終わっていると思えない。」と呻いたのは、その表れである。私の答が受け入れられたのは、具体的な生き方のレベルで回答したからだろう。ただ、もちろん、それだけ彼が追い詰められていたということでもある。

現代社会を造ってきた我々「大人」が深刻に受け止めるべきは、彼が子ども時代にその答を考えるための示唆さえ与えられていなかったことであろう。そもそも3浪目に入って私と彼がまず行ったのは、彼の「なぜ？」を論理的に形にすることだった。言い換えれば、彼は「自分が何を聞きたいのか？」さえ把握していなかったのである。自分が置かれた状況を把握できないまま追い詰められていく状況が、他者への憎悪・差別を生み出し、「人生が終わっている」という絶望がその抑制を放棄させ、高い知的素養にもかかわらず、彼を荒唐無稽な「右翼認識」に陥らせていったように思われる。

しかし、ある意味ではこれは当然のこととも言える。

第一に、現在の競争主義的な「教育改革」の下では学校・「教育産業」がその答や示唆を与えることは難しい。既に学校(特に私立校)自体が「偏差値競争」を強いられており、一般的には「頑張ってトップ大学を目指す。」という意識を生徒に植え付けないと学校の存続に関わる。A君自身の具体的な中高生活は不明だが、「なぜ、頑張らなければならないのか？」に立ち入って回答することが難しい情勢にあり、特に派遣教員では契約解除(要するにクビ)を覚悟しなければならないだろう。

なお、高校などで「新自由主義」「階級搾取」などについての一般的な説明はあった

かもしれないが、入試の問題との関連が明示されなければ答にはならない。彼にとっては「なぜ、自分が『負け組』なのか?」「自分はどうやって生きていったらいいのか?」が問題なのであって、彼が直面している入試の問題との関連付けを回避した一般的説明では自分の現状を把握し未来への道を模索する具体的手掛かりを得ることはできない。

学校がこうなのだから、私企業の塾・予備校などはなおさらである。私が、彼の「なんでこんな問題が出るんですか?」という問いに「平均点を下げて大学の『偏差値ブランド』を上げる、あるいは守るため」と答えることができたのは、家庭教師という授業形態に負う部分大きい。授業の場がご家庭である以上、私の答は会社には伝わりづらい。また、家庭教師はご家庭・受験生の希望する志望校に合格させるのが役割で、組織としての合格実績向上を課せられているわけではない。例えば、私は「トップ大学」の合格ノルマを課せられているわけではなく、私の答を聞いて彼が志望校を下げたとしても(実際はそうならなかったが)、直ちに会社から問題視されるわけではなかった。

第二に、現代では「教育問題」についてもマスコミが機能していない。例えば入試についての報道は、基本的に「『暗記力』を問う時代は終わった。」「必要なのは『考える力』。」といった「教育改革」についての政権側の言い分の垂れ流しである。まともな検証はほとんどなく、上記の学校の機能不全を始め、その具体的弊害はほとんど受験生・保護者に伝わっていない。すでに「教育改革」開始から20年近くが経過し、A君は生まれた時からこうした情報環境の中で育っているのであって、自分が置かれた状況を把握するための材料は与えられてこなかったと思われる。

とはいえ、私も回答のための糸口のそのまた端緒を与え、「負け続け」と思われる彼の人生にささやかな白星が付く手助けをしたに過ぎない。そもそもこの二つの問いは教師・講師やマスコミ関係者だけが答える問題ではなく、「大人」全体に突き付けられた課題と考えるべきであろう。

以上を踏まえつつ、彼がこの二つの疑問を考える上で「大人」が本来、与えるべきであった示唆を、あえて一つだけ挙げれば、権力批判の視座であろう。基本的に彼との「雑談」では安倍政権批判は控えていたが、「そもそも、何でこんな問題が出るんですか?」という問題に答えれば、現政権の教育政策が問題にならざるを得ない。すると、彼はどうしていいか分からない、といった顔をした。彼にとって権力批判は「サヨ

ク」の言説なのだろう。

なお、これだけ苦しめられているにもかかわらず、なぜ、彼が現安倍政権を支持するのかを疑問に思う人もいるかもしれないが、さほど不思議なことではない。彼を苦しめているのは、基本的に安倍政権ではなく「新自由主義」だからである。その影響は大なり小なり既成の政治勢力では免れがたいのであって、実際に旧民主党政権下でも「教育改革」が見直されることはなかった。彼は中高時代に民主党政権を経験しており、アベノミクスなどにより(弥縫策とは言え)「新自由主義」の痛みを緩和する一方、中国・韓国・北朝鮮などへの強硬姿勢によって憎悪・差別感情を吸収し、「戦後レジームからの脱却」を掲げてそれが全く新しい社会につながるかのような「幻想」を振りまく安倍政権に取り込まれるのは、ある意味では自然なことではあった。

しかし、権力者である以上、現在、彼を苦しめているのは安倍政権なのであり、それへの批判的視座は彼が上記の二つの疑問を考える上でも不可欠の前提であったと思われる。現在と将来が見えない時代に個人が生き残っていくためにも権力批判はますます重要であり、この時代の要請に応え得るような内実が問題となるにしても、意義自体は否定されない。しかし、A君にはその意義は伝わっておらず、権力批判はマスコミの「偏向」と認識されていた。現政権による教育現場への介入の強化や生徒の「内面」に直接的に介入する教育政策の推進は、若者からかかる視座をますます奪うものと言わざるを得ず、彼らが自分たちの経験を糧にし主体的に成長していく上でも大きな問題である。

ただし、この問題に学校・「教育産業」が対応するのは限界がある。国家権力によって権力批判自体が抑圧されている上、そもそも家庭教師を含め「先生」は子どもにとって巨大な「権力」に他ならないからである。勿論、このような限界の中でも子どもに接する者は課題に応える術を模索しなければならないが、やはりこの点も「大人」全体に突き付けられている課題と思われる。

勿論、一口に「ネトウヨ」と言っても多様な個性・境遇の人物がいるはずである。以上の私の知見はその中のたった一人と接した経験から得たものであり、多くの限界を持つことは言うまでもない。しかし、これらの疑問と課題を突き付けているのはA君だけではあり得ないであろう。現代社会の荒唐無稽な形での「右傾化」や「差別体質」、それをも大きな原因とする社会の分断を克服する上でも、A君との2年10か月が与える示唆は小さくないと思われる。

(第一稿、2018. 3. 24完成。第二稿、同. 7. 8完成)